

# ZEPHYROS

1999年  
第6号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス  
The National Museum of Western Art, Tokyo

# オルセー美術館展

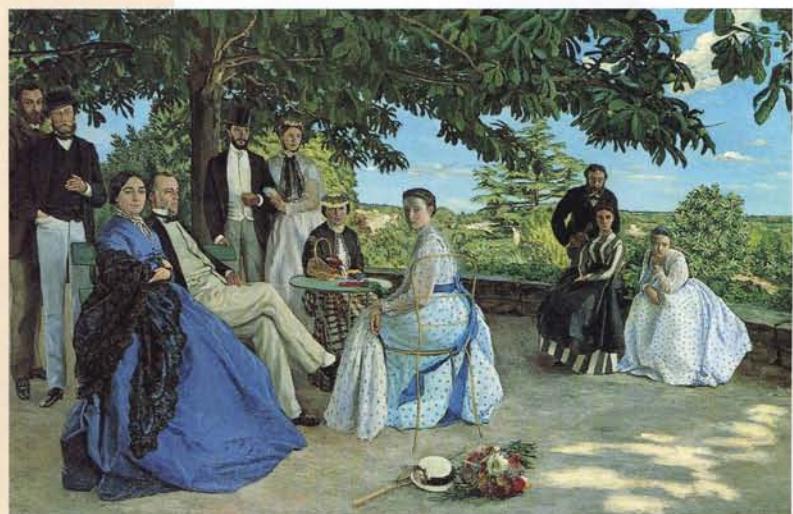
## 目 次

オルセー美術館展 1999 19世紀の夢と現実	2
主任研究官 高橋 明也	
ピカソ 子供の世界	4
研究員 田中 正之	
デジタルギャラリーと資料コーナーの開設	5
主任研究官 波多野 宏之	
2000年度展覧会スケジュール	5
エッセイ 「上野の杜」発 ⑤	6
成城大学教授 千足 伸行	
財団インフォメーション	7
ゼフェロスギャラリー	

この展覧会の主眼は、オルセー美術館の豊かな19世紀美術のコレクションの全体像を提示すると同時に、19世紀という進歩と科学的実証主義の時代を生きた人々の作品を通して、芸術家たちが示した二面性に照明をあてようとするところにあります。「人間と物語」、「歴史に対峙する人間」、「人間と現代生活」、「人間と自然」、「孤独な人間」という5つのセクションからなる本展は、絵画、彫刻、工芸、建築デッサン、素描、写真など、多様なジャンルの作品およそ200点で構成されています。

ここで言う二面性とは、産業化や新しい労働環境といった新たな社会を生きることの現実的欲望を持ちながらも、その現実から離れて神話や宗教、文学といった物語が称揚する遙か彼方の理想主義的な世界に憧れたり、自己の内面へ深く沈着し、夢想に浸ることを指向することです。つまりは「魂の悲しみや思考の果てしない憂鬱」と悲惨な運命に直面した孤独な人間の姿、といいかえてもよいかもしれません。

このような二つの傾向の相克は建築家や彫刻家、画家や工芸作家、写真家といった19世紀のあらゆる芸術家たちの作品に深く刻印されています。その顕著な例としては、ジェロームやドガによる神話的エピソードの喚起が挙げられるでしょう（「人間と物語」）。同時に、同じ作家たちが、徹底した写実精神に基づいた作品を制作している事実には興味深いものがあります。また普仏戦争のような同時代の同じ出来事に直面して



フレデリック・バジール  
《家族の集い》  
1867年  
©Photo RMN-H.Lewandowski

# 1999 19世紀の夢と現実

会期: 1999年9月14日(火)~12月12日(日)

主催: 国立西洋美術館/オルセー美術館/日本経済新聞社

も、メソニエのように写実的な技法で描く画家がいる一方、ギュスター・ドレのような幻想的なヴィジョンを展開させる作家も現れます。また他方では、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの《気球》や《鳩》の如く両者を巧みに融合させた寓意的手法が見られる場合もあります(「歴史に対峙する人間」)。

そしてさらに眼を凝らせば、本展のはとんどすべてのセクションにおいてこうした二面性が見いだされることでしょう。例えばジャック＝エミール・プランシュやリュック＝オリヴィエ・メルソンによって描かれた家族の情景や、カイユボットとレオン・フレデリック

による労働のモチーフの対比などはそうした好例です(「人間と現代生活」)。そして他のセクションにおいては、現実の一部を積極的に利用し、それを再創造しようとする新しいヴィジョンが明らかにされます。ルノワールやボナール、セザンヌやゴーガンによって描かれた人体。ホイッスラーやムンクによる風景。ガレやヴィオラ＝ル＝デュクは自然の客観的な研究から出発して、自らの創造的想像力のままに、植物や花をモチーフとした様々な要素を折り込み、変容させていきます(「人間と自然」)。

また、自らの属す共同体から疎外され孤独に引きこもるときは、人間の普遍的な真実の姿が露呈します。人類史上例を見ない産業社会の驚異的な発達の陰で、19世紀の作家たちは生活の諸相や創造の場において、二重の意味での疎外を経験せざるを得ませんでした。セザンヌやドガのモデルたちの黙して語らぬ姿や、ハンマースホイアルドンの人物たちの深く静謐な世界は、孤独な美術家たちの内面の声の反映なのです(「孤独な人間」)。

(主任研究官 高橋 明也)

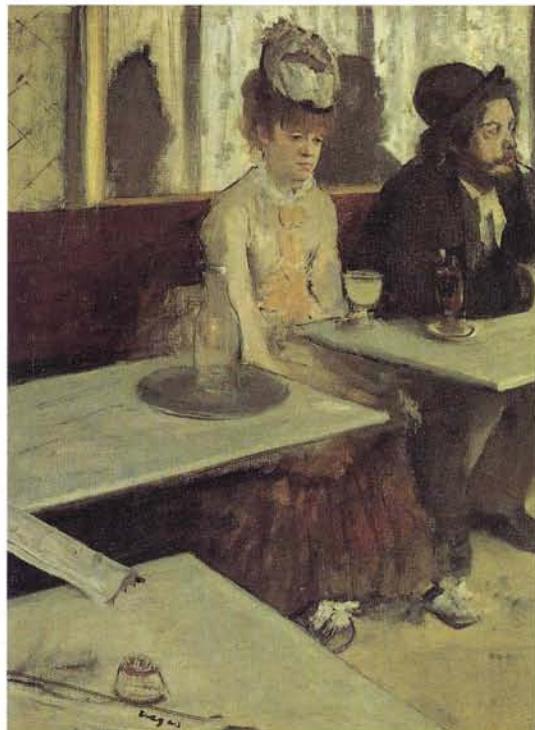


ピエール＝オーギュスト・ルノワール

《猫と少年》

1868-69年

©Photo RMN-R.G.Ojeda



エドガー・ドガ

《カフェの中で（アブサン酒）》

1875-76年頃

©Photo RMN-H.Lewandowski

# ピカソ 子供の世界

会期:2000年3月14日(火)~6月18日(日)

主催:国立西洋美術館／読売新聞社

今世紀の全ての画家の中で最も広く名を知られているのは、おそらくピカソであると言えましょう。次々と自分のスタイルをかえていったピカソは、その様式の革新性や大胆さ、あるいは様々な束縛から解放された自由奔放さを賞賛されてきましたが、同時にまた多くの人々を戸惑わせてもきました。放縱とも言える描き方の顔や人物の姿に当惑する人は決して少なくないはずです。しかし、その奔放な描き方ばかりに目を奪われていると、ピカソの絵のなかに描かれた世界を理解することはできません。主題やモチーフは、様式と同じくらいにピカソにとっては重要な探求の対象でした。

ピカソが取り上げた全てのモチーフの中で最も数多く、また最も精力的に描かれたもの、それは実は「子供」です。子供は、幼児期のキリストを描いたものをはじめ古くから美術の重要な主題の一つでしたし、20世紀の画家の多くも子供を描いています。しかし、ピカソほど子供を熱心に見つめ、その心理や身振り、行動を深く探求した作品を残した画家は他に類を見ません。本展覧会は、このピカソが捉えた「子供の世界」に光を当てるものです。

ピカソの作品のなかで、子供は様々な場面に色々な

姿で登場します。初期の作品では、貧しい人々や道化師の家族の一員として描かれ、愛情や希望といったものを象徴的に伝えています。1920年代には、最初の子供ボーラーが生まれたこともあって、聖母子像を思い起こさせる「母と子」のテーマの作品を数多く制作しました。



パブロ・ピカソ  
《アルルカンに扮したボール》  
1924年  
パリ、ピカソ美術館  
©Succession Picasso, Paris & BCF, Tokyo, 1999

ボーラーの誕生がピカソの活動に与えた影響は大きく、その肖像画には《アルルカンに扮したボール》など、この時期のピカソを代表する作品に結実したものもあります。1940、50年代の作品には、マヤ、クロード、パロマといったその後誕生した子供たちが描かれますが、この頃のピカソの関心は、子供たちの、時に破壊的で粗野なエネルギーに満ちた姿を捉えることにありました。晩年の作品になると、子供はブットーの姿で神話的な存在として表されます。

時代とともに様々な姿を変えながら登場する子供は、ピカソが子供というものにこだわり、幾度も捉え直そうとしていたことを教えてくれます。そして、それはまた彼の様式変遷の問題とも密接に関わり、その秘密を考えるきっかけも与えてくれます。例えば、様式上の革新を徹底的に押し進めたキュビズムの時代には子供は影を潜めますが、その後の古典主義的様式の作品では、子供は決して欠かすことのできないモチーフとなっています。

子供という一つのモチーフに焦点をあててピカソの全画業を眺めることは、彼の新しい側面を発見し、より深く理解するための格好の誘いとなりましょう。大胆な様式の背後に潜むピカソの繊細な観察眼や表現の豊かさが、この誰でも親しみのもてるモチーフを通して見えてくるはずです。油彩や素描などおよそ120点の作品が出品される予定です。（研究員 田中 正之）



パブロ・ピカソ  
《母と子》  
1921年  
個人蔵  
©Succession Picasso, Paris & BCF, Tokyo, 1999

## デジタルギャラリーと資料コーナーの開設

5月18日より、本館一階のフリーゾーンに「デジタルギャラリー」と「資料コーナー」を開設しました。

「デジタルギャラリー」には、従来のアートハイビジョンをさらに高精細化した「超高精細画像検索表示システム」の端末2台が置かれ、どなたでも自由にご利用いただけます。

このシステムは、一般来館者用の当館所蔵主要作品の検索閲覧と学芸研究用の機能をかねて開発され、世界最高レベルの超高精細モニタ(2.048×2.048画素、ノンインターレース方式)を使用しています。これは国立美術館としては初めてであり、高速LAN(ギガビット・イーサネットによるローカル・エリア・ネットワーク)上で本格的かつ恒常に公開運用するのは、世界の美術館のなかでも先駆的な試みです。

このシステムにより、作家名、主題、時代、作品名



デジタルギャラリー(奥)と資料コーナー

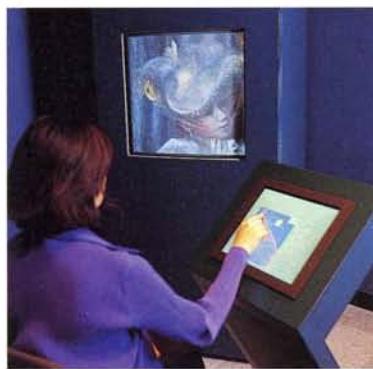
などからタッチパネルで検索し、ハイビジョンの約4倍の解像度でチラツキのない画像を縦横約50センチの正方形の超高精細モニタ上で閲覧することができます。また、部分拡大もでき、日本語のほか英語による解説を選択することもできます。

現在、公開用のデジタルギャラリーには、所蔵絵画154点(その3分の1は常設展示されていない作品)の検索閲覧が可能です。

一方、これに隣接した「資料コーナー」には、過去10年間に当館が刊行した展覧会カタログや研究報告書、年報、紀要、要覧、本誌バックナンバーなど約60種と美術辞典、美術館ガイドなどが備え付けてあり、気軽にご利用いただけます。ただし、コピーの設備はありません。

「デジタルギャラリー」「資料コーナー」を含む美術情報エリアは、ともに開館中はどなたでも(車椅子でのご利用も可能)無料で利用できます。

(主任研究官 波多野 宏之)



デジタルギャラリーの利用者用端末

## 2000 展覧会 スケジュール

### アムステルダム国立美術館所蔵 17世紀オランダ美術展 レンブラント、フェルメールと その時代

会期: 2000年7月4日(火)~9月24日(日)(予定)

主催: 国立西洋美術館/東京新聞

日蘭修好400年を記念する数多くの行事が、来年、両国でおこなわれる予定です。この展覧会はその中でも最も重要な記念事業で、アムステルダムにある国立美術館、通称、ライクスミュゼアム(ライクスは英語のナショナル、つまり、国立を意味するオランダ語です)の所蔵品から、レンブラントやフェルメールを初めとする油彩画50点と素描版画46点が出品されます。レンブラントの《夜警》がこの美術館の顔としてあまりにも有名ですが、ロイスクールやファン・ホイエンなど

の風景画、フェルメールやド・ホーホ、また、ステーンの風俗画、あるいは、ハルスの肖像画などこの時代の各分野にまたがる名品が所蔵されているライクスミュゼアムは、17世紀オランダ美術の最もすぐれたコレクションを誇っています。

レンブラントの自画像やフェルメールの《恋文》を始めとする一級の絵画と素描・版画によって構成されるこの展覧会は、17世紀オランダ美術を通観する優れた内容となっています。400年にわたる日蘭関係にも思いをはせながら、この17世紀オランダ美術展を是非ご覧ください。



フェルメール  
《恋文》1667年  
アムステルダム国立美術館

## 成城大学教授 千足 伸行

(せんぞく のぶゆき)

1940年(昭和15年)東京生まれ。東京大学文学部卒。TBS(東京放送)を経て東京上野の国立西洋美術館に勤務。その間、1970-72年、西ドイツ政府(当時)給費留学生としてミュンヘン大学に学ぶ。1979年国立西洋美術館を退職し、成城大学芸術学部に勤務。現在同大学教授。



「芝で生まれて神田に育ち」というが、「神田で生まれて上野に育ち」もありで、子供の頃、湘南の鵠沼海岸で数年間を過ごしたほかは、約半世紀、上野で育ち、暮らしてきたことになる。小、中、高、大、と学校も常に自宅から至近距離、10年以上勤めた国立西洋美術館も徒歩で10分たらず。現在の成城大学に移るまでは、学校も職場も自宅から半径にして大体500メートル以内に収まっていたわけで、まさに「井の中のかわづ」であった。子供の頃の実家は上野駅の浅草口を出てすぐのところだったので、上野公園まで子供の足でも5分ほど。まだ昭和20年代のこととて、どこも草ぼうぼうで今のようにきれいに整備されていたわけではないが、それでも子供にとっては格好の遊び場であった。今でも覚えているのは国立博物館の庭で、当時は今のような鉄製の頑丈な柵ではなく、背の低いこわれかけた生け垣だったので、小さな子供なら入るも出るも自由自在。かっと照りつける真夏の日差しの中、バッタや蝉を追いかけたものだが、美術品を見るためにチケットを買って博物館に入ったのは、それからかなりたってからのことであった。博物館でもうひとつ思い出すのは、中学時代、野球部で俊足だったので、運動会の季節ともなると短距離走やリレーにかりだされ、そのトレーニングのため仲間と集まったのが、博物館前の広い道路だったのである。ここだと長い直線コースが取れるので、人気の絶えた夜に集まって、街灯もろくにない暗がりで練習を繰り返したのをおぼえている。

こうして見るとせっかく博物館、美術館のすぐ近くに住みながら、そこにある美術品に親しむことはあまりなかったようだが、中、高時代は部活と受験勉強で手いっぱい、美術館どころではなかった、ということにしておきたい。後に勤務し

上  
野  
の  
思  
い  
出

た西洋美術館ができたのが1959年、筆者が大学に入ったころであるが、なんといっても記憶に残っているのは東京オリンピック開催、新幹線開通の年(1964年)のミロのヴィーナス展である。長蛇の列に加わって辛抱強く待ったすえに、庭に作られた特設会場での名作と対面したが、その時の感想がどんなものだったかは、今となっては定かではない。その後の国立博物館でのモナ・リザ展も100万人以上を動員したはずであるが、いかに名作とはいえたった1点だけの展覧会というのは、海外旅行など高嶺=高値の花だった時代なればこそ、と思っていたら、パリやルーヴルに行ったことなど自慢にも話題にもならないこのご時世に、またしても1点だけの展覧会。国立博物館でのドラクロワの《民衆を導く自由の女神》展がそれであるが、筆者の冷やかな予想に反してこれが連日長蛇の列。教科書などで誰もが知っている作品ということもあるだろうが、それにしてもわからない…。

ともあれ、上野公園に集約された一大文化ゾーンと、アメ横に代表される庶民の町というふたつの顔をもつ上野が、間もなくやってくる新世紀を境にお一層発展、繁栄することを願ってやまない。

主な著訳書：「ロマン主義芸術」(美術出版社)、「ターナー」(集英社)、「ロートレック」(集英社)、シャガールとルソー」(中央公論社)、「デューラー」(新潮社)、「近代彫刻」(小学館)、「クリムト」、「ムンク」、「ゴッホ」(以上朝日新聞社)、「クリムトとウィーン世紀末」(学研)、M.フリートランダー「芸術と芸術批評」(岩崎美術社)、S.ハンター「現代美術の歴史」(美術出版社)他

# 財団インフォメーション

## ◆平成10年度の事業報告

この年度は、国立西洋美術館の工事休館が終わり、9月には新設の企画展示館におけるクロード・ロラン展をもって、リニューアルオープンされることになりました。これに先立ち、4月28日から新館において、常設展が開始されましたので、財団も仮売店によってミュージアム・ショップ事業を始めました。9月からは恒久的な売店の位置も決まり、また、初めてブックショップを併設しました。他の事業は、事業計画に従い概ね前年度と同様の支援活動を行いました。

### 1. 展覧会・講演会等の支援

- ①国立西洋美術館と朝日新聞社の共催展「イタリアの光—クロード・ロランと理想風景」の開催に協力
- ②国立西洋美術館の特別展「ゴヤ、版画にみる時代と独創」の共催者としての支援
- ③国立西洋美術館とNHK共催展「エルミタージュ美術館所蔵—イタリア・ルネサンス美術展」の開催に協力
- ④「ゴヤ展シンポジウム」の支援
- ⑤「オランダ美術史研究と情報処理」講演会の開催にあたり経費面の支援

### 2. 資料収集、調査研究等の支援

国立西洋美術館の情報資料の充実に資するため、外国図書資料、文献、雑誌等を購入寄贈

### 3. 普及広報、職員研修等の支援

普及広報面の支援は特段なかったが、職員研修等に対しては、内外学会負担金を始めとする渉外用経費を支援

### 4. 出版物の刊行

- ①小企画展「マリオット・ディ・ナルドの《聖母戴冠》」報告書（英語版）
- ②小企画展「アサヒビール・コレクションの名品—20世紀初頭の人物画—」小冊子
- ③エルミタージュ美術館所蔵—イタリア・ルネサンス美術展覧会ガイド
- ④国立西洋美術館名作選（改訂版）

### 5. 機関誌等の発行

財団の機関誌を兼ねる国立西洋美術館ニュース「ゼフェロス」は10年9月に第4号、11年3月に第5号を刊行、特に第5号には、新ミュージアム・ショップとブック・ショップの写真を掲載。必要部数を国立西洋美術館に寄贈

### 6. ミュージアム・ショップの運営

4月28日からは常設展（仮売店）、9月15日から正式位置が決まり、ブック・ショップを併設して事業を開始。

ミュージアム・ショップでは、独自の常設展関係の、或いは同じく委託によるグッズの他、共催展関係のグッズを販売、ブック・ショップにおいては、西洋美術に関する書籍を中心とし、関連する和書など約1,300種を陳列・販売

### 7. その他

予定される展覧会の内外の調査旅費などの経費の支援、国立西洋美術館を訪れる内外の美術館関係者や学識者と同館職員との意見交換、交流を支援

## ◆賛助会員の募集

賛助会員制度は、財団発足後準備期間を経て平成8年から発足しました。わたしが美術館を育成する、そんな思いで納めてくださる会費は、間違いない財団を通して国立西洋美術館の事業に有効に使用され、やがてそれは美術愛好家の皆様に優れた展覧会として還元されます。賛助会には何時からでもお入りになりますし、会員には種々の優遇があります。ご加入希望の各位は、賛助会員要項を事務局に請求してください。

年会費は個人10万円、法人会員1口30万円で、何時からでもご加入いただけます。下記のような特典もございますので、ご加入希望の各位は、先ず応募要項を事務局までご請求ください。

### ■会員優遇内容

- 1. 国立西洋美術館優待券（個人1枚、法人1口1枚）が発行されます。  
（国立美術館・博物館等の展覧会観覧に有効です。）
- 2. 賛助会員証を差し上げます。  
（国立西洋美術館の展覧会に有効です。）
- 3. 国立西洋美術館の展覧会招待状、無料観覧券をお送りします。
- 4. 国立西洋美術館名作選や展覧会図録等をお送りします。
- 5. 国立西洋美術館の主催事業（講演会等）への無料参加ができます。
- 6. 国立西洋美術館内のミュージアム・ショップの販売品（対象商品）を割り引きいたします。

## ◆役員人事

### 役員・評議員の改選

3月25日理事会・評議員会が開催され、平成11年3月31日をもって任期満了になる役員・評議員の改選が行われ、全員が再選されました。任期は4月1日から2年間。

### 理事長、常務理事の互選

6月28日の理事会・評議員会において理事長、常務理事の互選が行われ、理事長に三角哲生氏、常務理事に福原匡彦氏が再選されました。

## ★ミュージアム・ショップからのお知らせ★

国立西洋美術館内のミュージアム・ショップは、同館内のフリーザーンにあり、開店以来好評で多くの観覧者の方々が利用しています。特にブック・ショップの売れ行きがよく、美術を愛好する方々の利用するところとなっています。

### 新しいグッズ紹介

ハンカチ	モネ	睡蓮（新バージョン）
ゴッホ	ばら（新作）	
プロンズ像	ロダン	考える人
	ロダン	青銅時代

ご来館をお待ちいたしております。

## 編集後記

西洋美術館も40周年を迎えました。古えの面影を残すのは、本館の建物だけになりました。社会の変化のスピードが早く50周年のときはどうなっていることでしょう…

これからもゼフェロスとともに、セイビを見守ってください。

ふ

## お詫び

ゼフェロス第5号のゼフェロスギャラリー、モーリス・ドニ《クアトロ・トルリ城、シエナ》には下記のクレジットがつきます。

©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 1999



ポール・ゴーガン  
(1848-1903)

《ブルターニュ風景》  
1888年  
油彩・カンヴァス 89.3×116.6cm

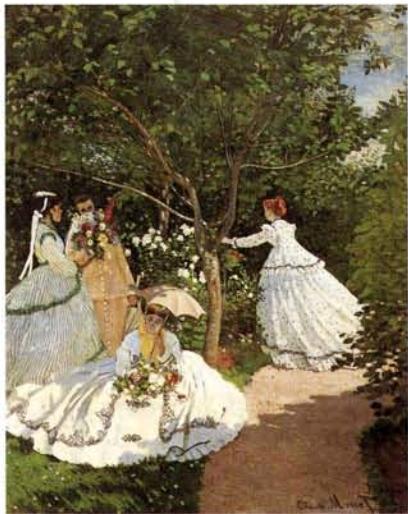
1883年、株の仲買人をやめ画業に専念し始めたゴーガンは、やがて妻子とも別居し、1886年、一人ブルターニュの寒村ポン＝タヴァンに滞在する。フランス北西部に位置するブルターニュ地方は、農業と漁業を中心とする生活の中に素朴な信仰が残る一方、古代からケルト系文化の色彩が強い、独特の土地であった。都會の喧噪から逃れたゴーガンは、恐らくそこに彼の求める楽園のイメージを見たのだろう、以後1890年までしばしばこの地に滞在し、海岸や山などに富む風景や、女性達が被る独特的のレースの髪飾に代表される固有の風俗を題材とすることになる。エミール・ベルナールと出会い、クロワゾニズムと呼ばれる明確な輪郭線と平面的な色彩に移行していくのも、このポン＝タヴァンであった。滞在2年目の本作品では、印象主義からクロワゾニズムへの移行が認められ、タッチは細かいが、既に個々の対象の形態を輪郭線に囲まれた単純な色面へと整理する傾向が見えている。



カルロ・ドルチ  
(1616-1686)

《悲しみの聖母（聖母として描かれた画家の妻テレーザ・ブケレッリ）》  
1650年代なかば  
油彩・カンヴァス  
82.5×67 cm (楕円形画面)

作者のカルロ・ドルチは17世紀のフィレンツェで活躍した代表的な宗教画家。しかし教会の大祭壇画など大画面の構図はあまり得意ではなく、むしろ小画面の個人用の絵を描く画家として人気があり、とりわけ甘美な聖母像や聖女・聖人像の制作に優れていた。この作品は、深い闇をバックに、鮮やかな青衣をまとった聖母の姿を描いている。頭上には、実際に金泥で描かれた神秘的な光が広がる。作品のタイプとしては、伝統的な「マーテル・ドロローサ（悲しみの聖母、嘆きの聖母）」の图像、すなわちわが子キリストの運命をめぐって悲しみにくれる聖母マリアを表わした単独像の形をとっている。ドルチは1654年にテレーザ・ブケレッリという女性と結婚しており、この聖母像は新婚の妻をモデルに描かれたといわれている。1708年に宣教師シドッティが日本にたずさえてきた《親指の聖母》（現在東京国立博物館蔵）は、ドルチによるこのタイプの聖母像のヴァリアントである。



クロード・モネ

庭の女たち

1867年

油彩・カンヴァス 255×205cm

©Photo RMN-H.Lewandowski

● 誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフェロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS

国立西洋美術館ニュース  
ゼフェロス

ZEPHYROS 第6号

印刷発行日 平成11年9月8日 (年2回発行)

編集 国立西洋美術館

印刷 株式会社 稲元印刷

発行者 財団法人 西洋美術振興財団

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

国立西洋美術館内

TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135